doi：10.20776/S13482084-68-P69
千葉大学教育学部研究紀要　第68巻　69～75頁（2020）

非行少年の将来認知に関する文献研究

田中健太郎[1)2)]*・羽間京子[3)]

[1)] 法務省・保護局
[2)] 千葉大学大学院・人文社会科学研究科・博士課程
[3)] 千葉大学・教育学部

Literature review of studies on perceptions about the future among young people with justice system involvement

TANAKA Kentaro[1)2)]*, HAZAMA Kyoko[3)]

[1)]Rehabilitation Bureau, Ministry of Justice, Japan
[2)]Graduate School of Social Sciences and Humanities of Chiba University, Japan
[3)]Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究は，未成年者の将来認知に関する国内外の先行研究を概観し，今後の研究の方向性を論じた。先行研究は，非行少年について，その時間的展望が短いこと，未来志向性が強いこと，将来への楽観性の存在を明らかにした。また，デジスタンス研究は，非行・犯罪から離脱した人のナラティヴの特徴の一つとして，将来への楽観性があり，それが離脱を支えることを示した。しかし，楽観性の質と非行・犯罪からの離脱の関係を論じた研究は乏しい。さらに，先行研究によると，施設収容が少年の時間的展望に影響を与えるとされているが，社会内で保護観察を受けている少年を対象とした研究は見られない。少年の保護観察対象者及び非行・犯罪から離脱した人を対象とし，将来への楽観性が非行少年の非行・犯罪からの離脱をどのように支えるのかを検討する，更なる研究が必要である。

This study reviewed international and Japanese studies on juveniles' perceptions about the future and discussed the direction for further research. The studies have found that young people with justice system involvement were likely to have a future orientation, a shorter time perspective, and an optimistic perception about the future. Moreover, studies on the desistance from crime reported that desisters were more optimistic about their future and had a sense of control over their lives, which are both useful in the desistance process. However, research has not examined the relationship between the quality of optimism and the desistance process. Though studies initially reported that institutionalization influenced young peoples' future time perspectives, few studies on individuals on probation or parole have been conducted. More studies on young people under supervision, as well as desisters, are required to examine how an optimistic perception assists juveniles' desistance from crime.

キーワード：非行少年（young people with justice system involvement），保護観察（probation and parole），時間的展望（time perspective），楽観性（optimism），デジスタンス（desistance）

1　はじめに－問題と目的

日本の少年法（昭和23年法律第168号）第24条は，非行少年[1]の健全育成のため（同法第１条），(a) 保護観察処分，(b) 児童自立支援施設又は児童養護施設への送致，(c) 少年院送致の３つの保護処分を定めている。

これらのうち，保護観察[2]は，社会内で，その対象となる人の改善更生を図る処遇であり，非行少年の健全育成に果たす役割は大きいといえる。なぜなら，少年院に送致されたとしても，いずれ少年院からの仮退院が認められ保護観察を受け，社会に再統合されることとなるためである（Hazama & Katsuta, 2019；法務総合研究所，2018b）[3]。

少年の保護観察を進めるためには，その対象となる少年の多くに認められる心理面や行動面などの特徴や傾向の理解が必要となる。なかでも，将来のとらえ方（以下「将来認知」という。）は，保護観察処遇上，特に整理が求められる。人の将来についての認知や欲求・動機と感情は相互に関連し，行動に影響を与えるものであり（都筑・白井，2007），非行少年の再非行防止を含めた健全育成のためには，彼／彼女らが，どのように自分の将来をとらえ，行動の結果を予測しているのかという観点からの検討が必要不可欠だからである（羽間，2012；田中，2014）。

そこで，本研究は，非行少年の将来認知に関する先行研究を概観し，少年の保護観察処遇に関する今後の研究課題について考察することとした。

連絡先著者：tanaken0927@chiba-u.jp

２　非行少年の将来認知に関する研究の動向について

2.1　時間的展望とは

将来認知に関する研究分野として，時間的展望（time perspective）が挙げられる。時間的展望とは，「いわゆる‘みとおし’を指す」（白井，1997，p.1）概念である。時間的展望の最も一般的な定義は，Lewin（1951）が示した，ある一定時点における個人の心理学的過去及び未来についての見解の総体である（都筑・白井，2007）が，個々の研究者が微妙なニュアンスの違いを含みながらこれに類似した用語を使用してきた（都筑，1999）。

たとえば，Zimbardo & Boyd（1999）は，時間的展望を，個人的な経験と社会的な経験の一連の流れが，時間的なカテゴリー又は時間の枠組みに割り当てられる，しばしば無意識的なプロセスであり，出来事が順序立たされ，一貫性を持たされ，意味づけられることに役立つもの，と定義した。我が国では，勝俣（1996）が，時間的展望を，時間的流れ（持続）の中におけるある時点での，個人ないし集団・社会の過去展望，現在展望及び未来展望の有機的関連の総体と定義した。

時間的展望の構造についても，国内外でいくつかのモデルが提唱されている。Mello & Worrell（2015）は，過去・現在・未来のとらえ方について，(a) 時間的態度（time attitudes），(b) 時間的指向性（time orientation），(c) 過去・現在・未来相互の関係（time relation），(d) 時間を意識する範囲や長さ（time frequency）及び (e) 過去・現在・未来の意味づけ（time meaning）という７つの次元からなる構造を示した。我が国においては，白井（1997）が，時間的展望は次の４つの要素からなると整理した。すなわち，(a) 狭義の時間的展望（過去・現在・未来が事象によって分節化されるものととらえた時の，その事象の広がりや数，相互の関係），(b) 時間的態度（過去・現在・未来に対する感情的評価のこと。あるいは，将来または過去の事象に対する肯定的あるいは否定的評価の総体），(c) 時間的指向性（過去・現在・未来の相互関係についての信念体系によるところの過去・現在・未来の重要性の順序づけ），(d) 狭義の時間知覚（時間の流れる早さやその方向性，連続性などに関する評価や判断）の４要素である。都筑（1999）は，時間的展望について，(a) 欲求・動機，(b) 認知及び (c) 感情・評価の３つの側面を，(d) 基礎的認知能力が支えるという構造を提示した。

2.2　時間的展望に関する国内外の研究動向

時間的展望の研究動向を見ると，まず，1930年代にIsraeliが人の時間に対する態度を分類し，時間の前途や見通しなどを意味するoutlookという用語を用いて，人の過去・現在・未来とらえ方の重要性について論じた（勝俣，1996; 都筑・白井，2007）。その後，FrankやLewinが時間的展望という用語を用いて研究を開始した（Stolarski, Fieulaine, & Van Beek, 2015; 都筑・白井，2007）。時間的展望の概念を最初に提唱したFrank（1939）は，人間は経験を重ねることにより，自らの行為の結果や，その結果の結果，その結果の結果の結果，というように，一連のつながりを考慮したうえで行動するようになり，過去の経験を踏まえて現在をとらえ，その後を予期できるようになると述べた。さらに，Frank（1939）は，その結果として，現在の状況や文化等から過去の経験をとらえ直したり，想定していた未来を再構成したりしながら生きることができるようになると論じた。Lewin（1951）は，人の全ての行動は，その人自身の人格と環境からなる心理的な「場」に基づいて生じるとする理論を展開した。その中で，その「場」にはFrank（1939）のいう時間的展望をも含まれると論じた。すなわち，Lewin（1951）は，ある一定時間の心理学的な「場」には，その人の過去への見解という意味での心理学的な過去や，その人の未来への希望という意味での心理学的な未来が同時に存在していると述べ，これらも人の行動を方向付ける要素であるとした。

Stolarski et al（2015）によれば，その後，Nuttin & Lens（1985）が，将来を考えることが動機付けの主な根源だと主張したことを契機に，時間的展望の研究が発展した。現在，多くの研究が，時間的展望は，人の発達や経験，環境，社会的地位によって形成され変化するとしている（Fieulaine & Apostolidis, 2015; Mello & Worrell, 2015）。また，時間的展望の内容は，人の判断や行動に影響を与えることが明らかとなってきた（Klicperová-Baker, Košfál, & Vinopal, 2015; Milfont & Demarque, 2015; Zaleski, & Przepiórka, 2015）。そして，時間的展望の考え方に沿って行動変容や心理的な回復を図ろうとする試みがなされている（Holman, 2015; Kazakina, 2015; Sword, Sword, & Brunskill, 2015）。

以上をまとめるならば，時間的展望は，今後の検討課題として，定義にコンセンサスが得られておらず，概念の統一の必要性があるものの（都筑・白井，2007），人の判断や行動に大きな影響を与え，様々な応用可能性があり得るとして活発に研究が行われているテーマであるといえる。

2.3　非行少年の時間的展望についての研究

2.3.1　非行少年の時間的展望の長さに関する研究

これまで，国内外で，非行少年の時間的展望に関する研究が複数行われてきた。その中でも，非行少年の時間的展望の長さの特徴を見出そうとする研究が多く行われ，それらを通して，非行少年の時間的展望における未来への広がりの狭さが指摘されてきた。

たとえば，Barndt & Johnson（1955）は，アメリカにおいて，26人の少年院在院者と，非行による処分歴のない同人数の少年に，「５月の明るい晴れた午後３時頃，２人の男の子が町外れの通りの近くを歩いていました。」との文章から始まる物語を語ってもらった。Barndt & Johnson（1955）が，その物語における時間的な長さをカテゴリー分けし，両者を比較したところ，少年院在院者の物語の時間的な長さが，対照群よりも，有意に短いことを見いだした。そして，Barndt & Johnson（1955）は，なぜ時間的展望が短くなるかは不明としながらも，まさにその短さが非行少年の特質であると結論づけた。また，Davids, Kiddler, & Reich（1962）は，アメリカの少年院に在院する男子24人と女子30人を対象に，Barndt & Johnson（1955）の追試をしたところ，時間的展望の長さに関する男女差は見いだせなかった。ただし，Davids

et al.（1962）は，Barndt & Johnson（1955）の対照群との比較では，少年院在院者の物語の時間的な長さが，対照群よりも，有意に短いことを見いだし，時間的展望の短さが非行少年の特質であると論じた。

Brock & Giudice（1963）は，アメリカの貧困層が多い地域の小学生120人に，盗みが可能な機会を与え，盗みをした群としなかった群とに分類した。そして，Brock & Giudice（1963）は，Barndt & Johnson（1955）と同じ方法に加え，20の単語（たとえば，学校，時間，ドア，昨日など）が印刷されたカードから大事な人に自分の話を伝える上で重要な10のカードを選ぶよう伝え，その中に時間的な概念がどれだけ入っているかを見ることで，両群の時間的展望を比較した。その結果，盗みをした群は，そうでなかった群に比べ，物語の時間的な長さが，有意に短く，時間的概念の入っているカードを選択する数が少ないことが明らかとなった。

Siegman（1961）は，イスラエルの若年者の刑務所の未成年の在院者30人とイスラエル軍に入隊してすぐの22人に，将来生じうる10の出来事と，それらが何歳で生じると思うかを尋ねた。Siegman（1961）は，被験者の現在の年齢と，出来事が生じる年齢として被験者が示した数値との差の中央値を，被験者の将来の時間の見通しのスコアとして使用して，両群を比較した。その結果，非行少年群のほうが対照群よりも，有意に将来の時間の見通しのスコアが低く，Siegman（1961）は，非行少年が遠い将来を見ておらず，かつ，現在を指向していることを示しているとした。

Stein, Sarbin, & Kulik（1968）は，アメリカにおいて，非行歴のない少年100人と，非行による処分歴のある100人に，Future Events Testを行った。このテストは，将来生じうる36の出来事（たとえば，大学卒業，外国に居住，新車購入，希望の職に就く，結婚，自然災害に罹災，死去など）について，絶対に生じないと思うものはその旨を，生じそうなら何歳に生じそうかを記載してもらうものである。その結果，Stein et al.（1968）は，記載された年齢の平均値について，非行歴のない少年のほうが，処分歴のある少年よりも有意に高かったことを見いだした。

我が国においては，南雲・川口（1980）が，少年鑑別所に収容されている少年158名と高校生59名を対象として，Future Events Testを応用した研究を行い，非行少年のほうが，その時間的展望が短く，将来起こりうる出来事に対してきわめてあいまいで，はっきりと頭の中に位置づけられておらず，将来起こりうると回答した事柄が社会的にみて好ましくないことが多いと論じた。大橋・鈴木（1988）は，少年鑑別所に収容されている少年56名と短期大学生23名に，Future Events Testを応用した研究を行い，非行少年の時間的展望は，短期大学生に比べ，過去，未来ともに時間的展望の広がりが狭く，密度が小さいことが明らかとなったとした。

2.3.2 非行少年の時間に対する態度や指向性についての研究

時間的展望研究においては，非行少年の時間に対する態度や指向性についての研究も見られ，非行少年は未来志向的であり，将来を楽観しているとの指摘がなされてきている。

前述のStein et al.（1968）は，処分歴のある少年のほうが，社会的に望ましい出来事について，より生じないとする傾向にあり，処分歴のない少年のほうが，より未来に関して現実的であったことから，非行少年が未来に関して現実的ではないと論じた。Landau（1976）は，イスラエルにおいて，少年受刑者計87人と少年の保護観察対象者16人，兵役中の少年46人，職業訓練校在籍中の少年22人に対し，複数の心理学的テストを行った結果として，非行少年は，非行のない少年に比べ，過去をよりネガティブに，未来をよりポジティブにとらえていたことを示した。

我が国では，勝俣ら（1982）が，少年鑑別所に収容されている少年50名と，一般の高校生50名を対象に質問紙調査を行い，(a) 非行少年は未来指向的であり，(b) 総じて，非行少年群のほうが未来・将来への期待が強く，しかも，自己の未来に対して楽観的であり，さらに，(c) 非行少年は，過去，現在，未来の時間的次元に対して，不快感ないし不安を抱いているにも関わらず，未来に対して楽観的でもあったことを見いだした。杉山・神田（1991）は，教護院[4]に収容されている少年63名と中学生284名を対象に質問紙調査を行い，非行少年の未来への指向性が強く示されたと結論づけた。Shirai（2000）は，少年鑑別所に収容されている少年59名と，高校園芸科の生徒46名，高校普通科の生徒66名に対して，質問紙調査を行った結果，非行少年は将来に対する考え方が楽観的で非抑うつ的であり，さらに，非現実的であると論じた。また，Shirai（2000）は，同時に，時間的展望体験尺度（白井，1994）への回答も求めており，その結果，非行少年は，希望と目標指向性において，他の２群よりも有意に得点が高かったことを明らかにした。石原・谷口・勝木・時田・横田（2003）は，少年鑑別所に収容されている少年と大学生に対して，複数の質問紙調査を実施し，非行少年は将来に対する考え方が楽観的で非現実的であることを見出した。西牧（2003）は，時間的指向性を測定するための尺度を作成して，少年鑑別所に収容されている少年151名と大学生125名に質問紙調査を行い，非行少年は未来指向的であるとした。石原・時田・渡部（2005）は，少年鑑別所に収容されている少年と一般中学生・高校生に対して，サークルテストを実施した。サークルテストとは，「過去，現在，未来を円でたとえて自由に書かせるという投影法的な手法によって，時間的指向性や時間的統合度を明らかにしようとするもの」（都筑，1999，p.44）であり，都筑（1999）によって，その再検査信頼性，妥当性が確認されている。そして，過去・現在・未来の３つの円のうちどれが最も大きいかで過去優位・現在優位・未来優位を判定した結果，未来優位は非行少年群が多く，過去優位は一般中学生・高校生群が多かったことが示され，非行少年は未来への思い入れが強いと論じた。

ただし，非行少年の時間的志向性や態度について，以上の先行研究とは異なる指摘をするものも見られる。たとえば，前述のとおり，Siegman（1961）は，非行少年が遠い将来を見ておらず，かつ，現在を指向していると論じた。また，Trommsdorff & Lamm（1980）も，90人の少年受刑者，90人の兵役中の少年，30人の保護観察中

の少年，30人の就労中の少年に対し，複数のテストを行った結果として，非行少年は，非行のない少年に比べ，現在の状況及び未来をよりネガティブにとらえていたとした。

さらに，非行少年の過去・現在・未来の次元が不連続であるとする研究もある。前掲の勝俣ら（1982）は，質問紙調査の結果，少年鑑別所に収容されている少年が時間的次元を不連続なものと認知しやすいことが示され，非行少年群のほうが時間的次元を不連続なものとしてとらえる傾向があると考えられると論じた。上述の石原ら（2005）は，サークルテストの結果について，２つの円の位置関係を得点化し，全ての組合せを合計した統合度得点を算出し，非行の有無と年齢の高低で分析した結果，一般中学生・高校生群のほうが，非行少年群よりも，有意に高い得点を示したとした。そして，この結果について，石原ら（2005）は，非行少年が，過去・現在・未来を不連続なものとしてとらえる傾向があることを実証すると論じた。

非行少年を保護観察対象者群と少年刑務所在所者群に分け，かつ，非行少年ではない少年を兵役中の群と兵役中ではない群に分けて調査をしたLandau（1976）とTrommsdorff & Lamm（1980）は，いずれも，非行の有無と施設収容の有無が，それぞれ，時間的展望に異なる影響を及ぼしうることも見い出した。すなわち，Landau（1976）は，少年刑務所在所群と兵役群に共通して強い現在指向性があること，その程度について，前者のほうが後者に比べより強いことを明らかにした。また，Trommsdorff & Lamm（1980）は，少年刑務所在所者群も兵役群も，施設収容の当初から収容の終了間際に至るまでに将来展望が変化する点では共通していたが，少年刑務所在所者群は，施設生活の終了間際において，兵役群と比べ，将来についてより悲観する傾向にあるという結果を得た。

2.3.3　非行少年の時間的展望を踏まえたかかわりについての研究

近年では，時間的展望の側面から，非行少年にどのようなかかわり方をすべきかを指摘する研究も見られる。Husman, Brem, Banegas, Duchrow, & Haque（2015）は，生徒の学習への動機づけを高める場面への応用の一例として，非行へのリスクのある生徒に，将来の時間的展望をどのように伸ばし，どのように成績を上げるかの具体的な道筋を示すことを提案した。また，Martinez & Fieulaine（2015）は，薬物使用者が持続的に薬物を使用しないよう働きかける方法として，(a) その人の時間的展望の傾向に合わせ，短期的に利益又は損失予防が得られることを強調する方法，(b) 長期的な将来展望を教育する方法，(c) 薬物使用者が，自分の時間的展望が受け入れられ，価値を見出されていると感じられるようなコミュニケーションをする方法を提示した。田中（2014）は，保護観察対象者と一般高校生に質問紙調査を行い，非行少年は，将来計画・目標の具体性は乏しいものの，自らの将来を考えていないのではなく，視点がより将来に向いていることなどを示した。そして，非行少年の保護観察においては，彼／彼女らが具体的で現実的な目標を立てその実現に向けて実際に進むことができるように働きかけることや，彼らは楽観的であると決めつけて接するのではなく，むしろ，将来計画や目標の具体性の乏しさに注目する必要性を指摘した。

3　考察

前述のとおり，時間的展望は，今後の検討課題として，その定義にコンセンサスが得られておらず，概念の統一の必要性があるものの（都筑・白井，2007），人の判断や行動に大きな影響を与え，様々な応用可能性があり得るとして活発に研究が行われている。また，非行少年については，その時間的展望が短いこと，未来志向性が強いこと，将来への楽観性の存在が先行研究によって明らかになっている。非行少年の将来認知の特徴をとらえようとするとき，これら時間的展望研究の蓄積は示唆に富む。

しかしながら，非行少年の時間的展望研究においては，大きく２つの課題がある。第一に，非行少年の時間的展望に関する研究において，更生した元非行少年の時間的展望に着目するものが見られないことである。非行少年の再犯防止や健全育成に関する研究は，これまで，犯罪行為又は非行行動の発生プロセスや発生原因を分析しようとしてきた（Laub, 2011 影山訳 2013）が，近年では，非行・犯罪からの離脱（desistance）に焦点を当てた研究が，欧米を中心に行われている（Laub & Sampson, 2001; 守山，2006; Kazemian & Farrington，2010）。デジスタンス研究とは，人の犯罪又は非行からの離脱の構造や過程を解明しようとする研究の総称といえる（守山，2006; 法務総合研究所，2018c）。なかでも，Maruna（2001）は，desistance研究において，非行少年の将来認知と関連する議論をしている。Maruna（2001）は，イギリスのリヴァプールにおいて，過去に複数回の犯罪をして服役したことのある65人にインタビュー調査を行った。Maruna（2001）は，調査対象者を，調査時点で１年以上犯罪行為をしない状態を続けていると認められる人（以下，「離脱群」という。）と，そうではない人（以下，「持続群」という。）に分類した。そして，Maruna（2001）は，両群のインタビュー調査結果を比較し，離脱群に特徴的なナラティヴを見いだした。Maruna（2001）によれば，離脱群のナラティヴには，「自身の『true self』を形成する，中核的な信念の形成」，「楽観的な認識（これは自身の人生をコントロールできるという感覚をもたらす）」，そして「生産的でありたい，そして，社会，とりわけ次の世代に何かお返しをしたいという願望」（p.88）の３つの特徴がみられ，これらが非行・犯罪からの離脱プロセスに重要な役割を果たすとされた。しかし，Marunaのいう楽観的認識と２.３で示した非行少年の時間的展望の特徴としての将来への楽観性の関連性や，非行少年の将来への楽観性の質と非行・犯罪からの離脱との関係を検討した研究は見られない。したがって，非行からの離脱，特に非行から離脱した人にあるとされる楽観的認識について，時間的展望の観点から明らかにする必要があるといえる。

第二に，研究対象の問題である。前述のとおり，Maruna（2001）が指摘する，非行から離脱した者にあるとされる楽観的認識について，時間的展望の観点から

明らかにするためには，更生した元非行少年を対象とした時間的展望研究を行う必要がある。加えて，少年の保護観察対象者を対象とした時間的展望研究を行うことも重要である。前述のとおり，Landau（1976）とTrommsdorff & Lamm（1980）は，非行の有無と施設収容の有無は，それぞれ時間的展望に異なる影響を及ぼしうるとした。しかし，非行少年の時間的展望についての研究を見ると，施設に収容されていない非行少年である少年の保護観察対象者に関するものは非常に少ない。たとえば，少年鑑別所に収容されている少年に対して調査を実施した勝俣ら（1982）は，調査対象者が少年鑑別所での収容生活を経た後に行われる家庭裁判所による審判を控えている状況にあることから，「規範的質問に対して，一層模範的回答を与えたことが推測される」（p.274）とした。教護院に収容されている子どもに対して調査をした杉山・神田（1991）も，回答者は「他者の監視を受けている状況にある。そのため彼らの回答には社会的に望ましいと考えられる方向にバイアスがかけられたのではないだろうか。」（p.67）とし，同様の点を課題として述べた。一方，保護観察を受けている少年は，現に社会生活を営んでいる非行少年であり，調査に参加したとしても，その後に，自らの保護処分の内容や施設からの退所の可否が決定される状況にはない。したがって，非行少年の中でも，保護観察対象者は，施設に収容されている少年に比べれば，回答の偏りの程度が低くなる可能性が高いと考えられる。以上から，少年の保護観察対象者に対する調査を行う意味は大きい。

今後は，更生した元非行少年と少年の保護観察対象者を対象とし，非行からの離脱との関係を時間的展望の観点から明らかにしようとする研究が求められる。

注

1　本稿では，少年法第２条第１項の定義に基づき，20歳に満たない男女を「少年」という。

2　保護観察は，(a) 保護司と保護観察官が協働しながら，(b) 保護観察の対象となる者（以下「保護観察対象者」という。）と定期的に面接するなどの方法により接触を保ち，その行状を把握することや，(c) 遵守事項という保護観察期間中に遵守すべき約束事を守るよう必要な指示，措置をとるなどの指導監督を行い，また，(d) 保護観察対象者が自立した生活を送ることができるように住居の確保や就職の援助などの補導援護を行うことによって実施される（法務総合研究所，2018a; 勝田，2016）。

3　少年院に収容された非行少年は，原則として20歳になれば出院（少年法第137条第１項）するが，少年院からの仮退院を許された場合，非行少年は，社会内で保護観察を受けることとされている（更生保護法（平成19年法律第88号）第40条及び第42条）。統計では，2017年に全国の少年院から出院した3,475人のうち，少年院からの仮退院により出院した少年が2,469人を占めている（法務省大臣官房司法法制部，2018）。

4「教護院」とは，平成９年の法改正によって，「児童自立支援施設」に改められた，児童福祉法（昭和22年法律第164号）に定める児童福祉施設の一つである。不良行為をなし，又はなすおそれのある児童及び家庭環境その他の環境上の理由により生活指導等を要する児童を入所させ，又は保護者の下から通わせて，個々の児童の状況に応じて必要な指導を行い，その自立を支援し，あわせて退所した者について相談その他の援助を行うことを目的とする施設（児童福祉法第44条）とされている。

引用文献

Barndt, R. J., & Johnson, D. M.（1955）. Time orientation in delinquents. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, *51*, 343-345.

Brock, T. C., & Giudice, C. D.（1963）. Stealing and temporal orientation. *Journal of Abnormal & Social Psychology*, *66*, 91-94.

Davids, A., Kidder, C., & Reich, M.（1962）. Time orientation in male and female juvenile delinquents. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, *64*, 239-240.

Fieulaine, N., & Apostolidis, T.（2015）. Precariousness as a time horizon: How poverty and social insecurity shape individuals' time perspectives. In Stolarski et al.（Eds.）, *Time perspective theory; Review, research and application*（pp. 213-228）. Switzerland: Springer International Publishing.

Frank, L. K.（1939）. Time perspective. *Journal of Social Philosophy*, *4*, 293-312.

Frankl, V. E.（1984）. *Man's search for meaning.* New York: Washington Square Press.

羽間京子（2012）. 虐待を背景に有する女子非行少年に対する処遇について. 生活指導学研究, *29*, 159-174.

Hazama, K., & Katsuta, T.（2019）. Factors associated with drug-related recidivism among paroled amphetamine-type stimulant users in Japan. *Asian Journal of Criminology.* Advance online publication.

Holman, E. A.（2015）. Time perspective and social relations: a stress and coping perspective. In Stolarski et al.（Eds.）, *Time perspective theory; Review, research and application*（pp. 419-436）. Switzerland: Springer International Publishing.

法務省大臣官房司法法制部（2018）. 矯正統計年報Ⅱ キタジマ

法務総合研究所（2011）. 平成23年版犯罪白書　日経印刷

法務総合研究所（2018a）. 平成30年版犯罪白書　昭和情報プロセス

法務総合研究所（2018b）. 研修教材 平成30年版更生保護　キタジマ

法務総合研究所（2018c）. 青少年の立ち直り（デジスタンス）に関する研究, 法務総合研究所研究部報告, 58.

Husman, J., Brem, S. K., Banegas, S., Duchrow, D. W., & Haque, S.（2015）. Learning and future time perspective: the promise of the future: Rewarding in the present. In Stolarski et al.（Eds.）, *Time perspective*

theory; Review, research and application (pp. 131-141). Switzerland: Springer International Publishing.

石原安希子・谷口五郎・勝木尚子・時田　学・横田正夫 (2003). 非行少年の時間的展望に関する研究－異なる測定方法を用いた比較検討－　犯罪心理学研究特別号, *40*, 18-19.

石原安希子・時田学・渡部正 (2005). 非行少年の時間的展望に関する研究－サークル・テストの検討から－ 犯罪心理学研究特別号, *42*, 48-49.

勝俣暎史 (1996). 時間的展望の概念と構造　熊本大学教育学部紀要（人文科学), *44*, 307-318.

勝俣暎史・篠原弘章・村上みどり (1982). 非行少年の時間的展望－少年鑑別所収容少年の場合－　熊本大学教育紀要人文科学, *31*, 267-277.

勝田聡 (2016). リスク・ニード・リスポンシビティモデルを踏まえた保護観察処遇についての考察　千葉大学人文社会科学研究, 32, 63-79.

Kazakina, E. (2015). The uncharted territory: time perspective research meets clinical practice. Temporal focus in psychotherapy across adulthood and old age. In Stolarski et al. (Eds.), *Time perspective theory; Review, research and application* (pp. 499-516). Switzerland: Springer International Publishing.

Kazemian, L., & Farrington, D. P. (2010). The developmental evidence base: Desistance. In Towl, G. J., & Crighton, D. A. (Eds.), *Forensic Psychology* (pp.133-147). Hoboken: Wiley-Blackwell.

Klicperová-Baker, M., Košfál, J., & Vinopal, J. (2015). Time perspective in consumer behavior. In Stolarski et al. (Eds.), *Time perspective theory; Review, research and application* (pp. 353-369). Switzerland: Springer International Publishing.

Landau, S. F. (1976). Delinquency, institutionalization, and time orientation. *Journal of Consulting & Clinical Psychology, 44,* 745-759.

Laub, J. H. (2011). The development of Criminals: Life-course theories. In Lilly, J. R., Cullen, F. T., & Ball, R. A. (Eds), *Criminological Theory: Context and Consequences* (5th Edition). Thousand Oaks: Sage Publishing.
（リリー, J.R., カレン, F.T., & ボール, R.A. 影山任佐監訳 (2013). 犯罪学（第５版）－理論的背景と帰結－　金剛出版）

Laub, J. H., & Sampson, R. J. (2001). Understanding desistance from crime. In M. Tonry (Ed.), *Crime and Justice, 28* (pp.1-69). Chicago: University of Chicago Press.

Laub, J. H., & Sampson, R. J. (2003). S*hared beginnings, divergent lives: Delinquent boys to age 70*. Cambridge: Harvard University Press.

Lewin, K. (1951). *Field theory in social science.* New York: Harper Brothers.

Martinez, F., & Fieulaine, N. (2015). Time and the misfits: temporal framing and priming in persuasive communication. In Stolarski et al. (Eds.), *Time perspective theory; Review, research and application* (pp. 385-402). Switzerland: Springer International Publishing.

Maruna, S. (2001). Making good: How ex-convicts reform and rebuild their lives. Washington, DC: American Psychological Association.

Mello, Z. R., & Worrell, F. C. (2015). The past, the present, and the future: a conceptual model of time perspective in adolescence. In Stolarski et al. (Eds.), *Time perspective theory; Review, research and application* (pp. 115-129). Switzerland: Springer International Publishing.

Milfont, T. L., & Demarque, C. (2015). Understanding environmental issues with temporal lenses: issues of temporality and individual differences. In Stolarski et al. (Eds.), *Time perspective theory; Review, research and application* (pp. 371-383). Switzerland: Springer International Publishing.

守山正 (2006). 欧米における「デジスタンス (desistance)」研究の状況－犯罪常習者か犯罪を止めるとき－　犯罪と非行, 150, 75-94.

南雲正義・川口和男 (1980). 非行少年と時間的展望 犯罪心理学研究特別号, *17*, 24-25.

西牧利浩 (2003). 非行少年の時間的展望に関する研究 犯罪心理学研究特別号, *41*, 86-87.

Nuttin, J., & Lens, W. (1985). *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven University Press and Erlvaum.

大橋靖史・大橋和佳 (1989). 非行少年における時間の見透かしの構造の分析　犯罪心理学研究特別号, *27*, 50-51.

大橋靖史・鈴木明人 (1988). 非行少年の時間的展望に関する研究　犯罪心理学研究特別号, 26, 4-5.

白井利明 (1994). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究　心理学研究, *65*, 54-60.

白井利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学　勁草書房

Shirai, T. (2000). Les perspectives temporelles des delinquants: Relier experiences passees et perspectives d'avenir. *Revue Quebecoise de Psychologie, 21*, 2, 239-253.

Siegman, A. W. (1961). The relationships between future time perspective, time estimation, and impulse control in a group of young offenders and in a control group. Journal of Consulting Psychology, 25, 470-475.

Stein, K., Sarbin, T. R., & Kulik, J. (1968). Future time perspective: its relation to the socialization process and the delinquent role. *Journal of Consulting & Clinical Psychology, 32,* 257-264.

Stolarski, M., Fieulaine, N., & Van Beek, W. (2015). Time Perspective theory: The introduction. In Stolarski et al. (Eds.), *Time perspective theory; Review, research and application* (pp. 1-13). Switzerland:

Springer International Publishing.
杉山成・神田信彦（1991）．時間的展望に関する研究－非行少年の時間的展望1－　立教大学心理学科研究年報，*34*，63-69.
Sword, R. M., Sword, R. K. M., & Brunskill, S. R.（2015）. Time perspective therapy: transforming Zimbardo's temporal theory into clinical practice. In Stolarski et al.（Eds.），*Time perspective theory; Review, research and application*（pp. 481-498）. Switzerland: Springer International Publishing.
田中健太郎（2014）．非行少年の将来認知の特徴を踏まえた保護観察処遇のあり方について　千葉大学教育学研究科修士論文（未公刊）
Trommsdorff, G., & Lamm, H.（1980）. Future orientation of institutionalized and noninstitutionalized delinquents and nondelinquents. *European Journal of Social Psychology, 10,* 247-278.
都筑学（1999）．大学生の時間的展望－構造モデルの心理学的検討－　中央大学出版部
都筑学・白井利明（2007）．時間的展望研究ガイドブック　ナカニシヤ出版
Zaleski, Z., & Przepiórka, A.（2015）. Goals need time perspective to be achieved. In Stolarski et al.（Eds.），*Time perspective theory; Review, research and application.*（pp. 323-335）. Switzerland: Springer International Publishing.
Zimbardo, P. G., & Boyd, J. N.（1999）. Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences metric. *Journal of Personality and Social Psychology, 77,* 1271-1288.